

「抱っこ」をめぐる母親の意識について

京野 尚子

(日立家庭教育研究所)

はじめに

筆者は、当研究所で0,一歳児をもつ母親とその子どもとの親子支援グループ活動に約10年かかわってきた。母子同室で、乳幼児たちの遊びを展開しながら毎回“子育ての悩みを語りあう”という母親グループ活動を行ってきた。

その中で、近年、子どもを抱っこすると“つっぱっていやがる”、あるいは、“いつまでもまとわりついて離れようとしなない”など母親と子どもとの“抱っこ”という接触をめぐる葛藤が見られるようになった。また、母親自身の語りからも“子どもにべたべたとまとわりつかれるのがうっとうしい、突き放してしまう、”あるいは、かまいすぎてしまうなど“の悩みが明らかになった。このように抱っこをめぐる親子の葛藤がみられたことから、保育的視点から子どもの代弁者として親子支援することの必要性を感じた。そこで具体的な事例をあげながら、親子の関係調整にどのような支援を試みたか、抱っこをめぐる身体的サポート、及び心理的サポートについて報告する。

方法

- 1) アンケート調査：1999年から2001年に当研究所に通った母親112名を対象
- 2) 母親グループでの母親の語り
- 3) 親子遊びの実践場面からの事例

結果・考察

1) アンケート結果

対象児0から2歳<母親の平均年齢>32.8才
出生順位第一子60.3%、第二子39.2%、第三子0.5%、核家族90.2%

<母親の職業経験>は、いずれも90%が職歴あり、そのうち約99%が出産と同時に専業主婦。

<育児の悩み>「子どもの扱い方がわからない」という訴えが全体の67%であった。

「子どもの扱い方がわからない」と回答した母親の48.2%が子どもとの“抱っこ”をめぐる葛藤がみられた。

2) 母親グループでの母親の悩みにまつわる語り

語り1：子どもにまとわりつかれるとうっとうしくて

突き放したくなる。

語り2：子どもに抱っこを拒否されると嫌われているようで育児に自信がもてなくなる

語り3：かまいすぎて自分がふりまわされてしまう
このような親子の抱っこをめぐる葛藤に対して、試みたサポートについて記述する。

“抱っこ”をめぐる身体的サポート

a) 抱っこをとりいれた手遊び

毎回朝の会で抱っこを取り入れた手遊びを繰り返して行うことで親子で抱っこの心地よさを体験する。

b) スタッフが母子をともに背後から支えることで抱っこの感覚を伝える

抱っこを拒否しがちな子どもには、子どもを抱く母親をもスタッフが後ろから支えることでぎゅうの感覚を伝えながら母子が安心して抱っこする体験をする。

これは、不安があったり自信のない母親にとってまず、体をしっかりと支えること、包みこむことから自信の回復をはかるよう心がけた。母親が安心して包まれるという体験から次第に子どもも落ち着いたり、我が子をしっかりと抱きしめられるようになることで母親がほっと涙するなど母親自身の寂しさが安堵に変わったなどの体験ができた。

c) 一日5分抱っこの勧め

子どもとの抱っこがしっくりいかないと語る母親に対して寝る前に5分間静かに抱っこする時間を作ることで形からでも抱きしめることの効用について語った。

抱っこをめぐる心理的サポート

母親の悩みをじっくり聞くという心理的サポート（これについては、事例参照）を半年間におこなった。

半年後の母親たちの語りについて

Aさん：スタッフの方に我が子と私自身を抱きしめてもらったら母親である自分が慰められて涙がこみ上げてきた。抱きしめてみたら我が子がいとおしくかわいいと心から思えた。

Bさん：5分間抱っこしたら子どもが人並みに落ち着いてきた。こちらが自信を持って抱っこすれば子どもって安心するんですね。私が嫌われていたんじゃないんですね。よかった。

Cさん：まとわりつく我が子をうっとうしい思う反面、実は私の方がどこかで子どもを引き留めておきたいと

いうこだわりがあってそれが子どもには伝わっていたのかもしれない。私の中で何かかぶっきたら不思議に子どもがしがみつかなくなり、不安な感じがしなくなったような気がする。

Dさん:この子が私から離れられなかったのではなく、私が寂しかったのかもしれない。自分の話をじっくり聞いてもらったら気持ちが軽くなった。

Eさん、今まで子どもにだめといたり、待たせたりすることは子どもの心を傷つける事だとばかり思っていて、言われるままに振り回されていた。もっと毅然とした気持ちで接するようになったことでまとわりつきが少なくなったように思う。

次に語り2からある親子の事例を取り上げ考察する。

<事例1 M子2歳> (父、母、兄の4人家族)

「子どもにべたべたとまとわりつかれることにうっとうしさをを感じる」と語る母親

事例の概要

初めての集団参加でMは緊張気味に母親にしがみつこうように抱っこしながら周囲をみていた。2ヶ月すぎるとMは室内が退屈そうにぐずぐずしはじめ、母親に抱っこ、抱っことしつこく求めた。母親は、「また、抱っこなんだからもう」としばらく抱かないが、あまりせがむので抱っこすると今度はしがみついたまま離れず、しまいには、母親を思いきりたたいて泣きじゃくった。スタッフが「Mちゃん、お外に行きたいんじゃないかな」というとMはそうなのと言わんばかりにしゃんと立ち上がり、母親を引っ張って外にでた。4ヶ月頃になるとMは自分から「お外にいきたい」というようになる。外に出ると終始母親がMを背後から抱いている。Mは時折、背中をうっとうしそうに手で押し返そうとするが母親はいっこうにおかまいなく、「Mがかわいい・」とまとわりついていた。Mが自分から「ままごとしたい」と言い出すし、スタッフがままごとセットを用意するとMが母親を払いのけてすっとテーブルの前に座った。あわてて母親が隣に座ろうとしたのでスタッフが「今日は、ママと向かい合ってみる？」と言うと母親が「でも一人で座れるかしら」と不安そうに声をかける。Mはけろりとして「うん」という。スタッフが「ママが見てくれるから安心ね」というと母親の方がほっとした様子で座り直した。テーブルをはさんで向かいあって遊ぶ。母親がMにいろいろ口出しをはじめると「いや、自分で!」という。そこへYちゃんが「いれて」とくるとMは、「いいよ」とすんなり席をずらした。母親は、「あら、Mちゃん、ママお隣に行こうか」というとMは怪訝そうにするのでスタ

ッフが母親の隣で「ここで見てみましょうか」というと母親は安心したように座り直す。母親はMが反抗的になってきたことに戸惑い、その悩みを語り出す。スタッフはその話を聞きながら目の前のMの成長やこれまでの母親の努力など語った。Mは、Rが“貸して”とやってくると“いいよ”とはじめて貸すことができ、母親は“Mがはじめてお友達にどうぞしている”とうれしそうであった。Mが思わず母親に抱きついてくると母親はぎゅっと抱きしめたがMはあっさり離れていった。スタッフが“子どもって求められたときにほんの少しだけ抱いてやると気が済むのよね、”という母親が“本当ですね。こっちが抱きたいと思う時はあっさり離れちゃうし、寂しいですね”と本音を語った。(半年後の母親の語り:M子は、最後の子どもだし手離すのが寂しくてついついかまってしまう。そのくせべたべたされるとうっとうしくて私の気分を抱っこしていた。私自身ももっと子離れしないと・・・)

考察

母親の語りでは、“子どもにべたべたとまとわりつかれることにうっとうしさをを感じる”というものであった。しかしその行動面では、言葉とは裏腹にむしろ母親の方が子どもの身体にくっつきながら子どもを手放すことへの不安がみられ、母親が無意識に子どもの後を追う場面が多くみられた。

母親の語りと行動とのずれは、子どもへの接し方へも一貫性がなく、子どもの側の戸惑いや不安を生じさせるものに見えた。子どもが手ではらったり、目で母親をうっとうしそうにする場面でも子どもからの非言語的なサインにはあまり気づかず母親の子どもへの身体的な子離れの葛藤がみられた。筆者が母親の隣に居続けることで少しずつ我が子との距離がとれるようになり次第に母親は、自分の悩みを訴えるようになっていった。また、距離をとることで我が子をじっくりと見ることができるようになっていった。こちらが親子の心理的な葛藤を読みとり、子どもの発する非言語的な心のサインを母親に解説しながら伝えるという代弁者としての保育的かわりが必要と思われた。一方、子どもが抱っこをいやがるように感じると語る母親は、我が子に嫌われているのではと訴えることがしばしみられたが前述のように身体的サポートを試みることから少しずつ自信を回復していった。

このように乳幼児をもつ母親を心理的及び身体的サポートすることが重要であるが、保育的視点から子どもの代弁者として非言語的なサインを伝達しながら母親自身の読みとる力が育つ親子支援をしたいと思う。